

ゴーリキイに関する覚え書

＜コロレンコとの交友をめぐって その1＞

松 本 忠 司

- 1 「大学」時代
- 2 放浪と模索の時代
- 3 作家的出発の時代（以上今回掲載）
- 4 新聞記者時代
- 5 アカデミヤ事件
- 6 大革命期
- 7 晩 年

「B. Γ. コロレンコの名は私のなかですくなくならず良い記憶とむすびついている。⁽¹⁾」——マクシム・ゴーリキイは回想記『B. Γ. コロレンコの思い出より』の冒頭をこのように始めている。前世紀末から今世紀初頭のロシア史最大の激動期に、ともに時代の最高の知性と良心とを代表した二人の作家の30年にわたる文学的および生活的むすびつきは、それ自体がすでに注目すべき文学現象として文学史に重要な位置を占むものと考えられよう。

両作家の最初のむすびつきはコロレンコが、トルストイにつぎチェーホフとならぶ著名な作家として才能の満開期にあり、活潑な、多面的な活動を展開しており、ゴーリキイがまだ無名の、独学の青年アレクセイ・ペシコフであって、作家への道を模索していた時期に始った。しかしすでに批判的リアリズムの限界の近づきつつあることを予感し、「リアリズムとロマンチズムの統一」による新しい芸術手法の誕生を期待していたコロレンコは、⁽²⁾ゴーリキイの

(1) «Из воспоминаний о В. Г. Короленко». М. Горький : Собрание сочинений в тридцати томах. том 14, Москва., 1949~1955, стр. 241. (以下《作品名》C. c., т. 14. с. 241. と略記する)

(2) 拙稿「80年代のロシア文学主潮」小樽商大人文研究第16輯参照。

最初の習作の表面をおおう未熟と不調和の深奥にきらめく芸術の新しい方向への息吹きを見逃がしはしなかった。初心の作家に必要な助言と指導と配慮とを与えながら、コロレンコはゴーリキイに作品発表の機会を提供し、かれを文学の殿堂へと導いていった。のちにゴーリキイは次のように述懐している。「彼は私の師であつた、ながい期間ではないが師であつた。そしてこのことは今日に至っても私の誇りとするところである。」また、こうも書いている。「彼のおかげで私は大きな文学へと進みました。彼は私のために非常に多くのことをしてくれ、多くのことを指示し、多くのことを教えてくれました……このことを書いてください、かならずこう書いてください——彼に、ゴーリキイにコロレンコは書くことを教えた、もしもゴーリキイがコロレンコから学び取ったものがすくないとすれば、それは彼に、ゴーリキイに罪がある。⁽¹⁾」ここでいわれている師弟関係は、ゴーリキイの急速な成長や、二人の資質・信条・政治的立場などのちがいによって比較的短期間に終っている。しかし、芸術手法と政治的立場の超えがたい相違にもかかわらず、専制政治との非妥協的たたかい、近代主義文学との対決においては二人はつねに一致し、たがいに尊敬する同志としてのかかわるぬ友情をもちつづけていた。

この覚え書のなかでは、ゴーリキイの青年時代からの足どりを確かめながら、おもに回想記、日記、往復書簡、第三者への書簡に拠って二人の作家の交友を調べることを目的としている。とくに往復書簡については、わが国ではほとんど紹介されていないので、できるだけ全文を紹介するよう努めたい。

1

コロレンコとゴーリキイの知己は1889年の末にはじまる。

「どこからだったか憶えていないが、ニージニイ・ノーヴゴロドに帰って、私はだいぶ前にシベリヤでの政治的流刑を終えた作家のコロレンコがこの町に住んでいることを知った。この人の署名のある短篇小説を私はすでに読んでい

(1) Д. Городецкий への書簡より。В жур. «Семья», 1899, No.36.

た。そしてそれらは私のなかに新しい印象を、《人民主義者》^{ナロードニキ}文学から私が感得していたものとはそぐわぬ印象をよび起したものである……⁽¹⁾」とゴーリキイは回想している。

コロレンコの滞在を知っても最初のうち、ゴーリキイはことさらコロレンコに近づこうという希望をもたなかったらしいが、「あるとき、苦しい日、ついに私は自分の叙事詩をヴェ・ゲ・コロレンコに見せようと決心し」彼の家を訪れる。玄関の前の舗道の雪除けをしていたコロレンコは、「私の来訪の理由の説明を黙って聞いた。それから思いたそうとするように眼を細めた。

——聞いたことのある苗字です。あれはあなたのことではなかったかな、2年ばかり前、ロマシ、ミハイロ・アントーノフという人が手紙に書いてよこしたのは。そうです！²⁾」

有名な作家であり、社会評論家・社会活動家としても傑出した存在であるコロレンコに関して、知識慾に燃え文学的習作などに手を染めていた一人の青年がなにがしかの知識をもっていたことにはさして不思議はないが、この最初の出合いの「2年ばかり前」から、アレクセイ・ペシコフなる独学の、すこし風変りな青年の名がコロレンコの記憶の片隅にでもとどめられていたことは一応注目に値しよう。この間の事情を明らかにするために、この時期に至る数年間のペシコフ青年の生活の歩みを簡単にではあるが辿ってみよう。

1884年の夏、16才になったアレクセイ・ペシコフ（ゴーリキイ）は、故郷のニージニイ・ノーヴゴロドを去ってカザン市に赴く。「こうして——私はカザン大学に学びにゆく、それ以下のことをしにゆくのではない。

大学についての思想を私に吹きこんだのは中学生のエヌ・エヴレイノフで……〔彼は〕私が《科学にたいする特別な才能》をもっているということを私に信じさせ始めた。……エヴレイノフがいうには、カザンで私は彼のところに住み、秋と冬のあいだに中学の課程をすませ《あれこれの》試験——《あれこ

(1) 《Из воспоминаний о В.Г. Короленко》 С.с. т.14. с.241.

(2) 《Время Короленко》. С. с. т. 15. с. 13~14,

れの》、彼はこう言った——を受ける。大学は私に官費をだす、そして5年もたてば私は《学者》になるというのだ。⁽¹⁾しかし「大学で勉強する幸福のためには拷問さえ辞しはしない」⁽²⁾という熱心な向学心にもかかわらず、よるべない孤児で、小学3年中退の学歴の持主である少年を大学は受け入れてはくれなかった。大学のかわりに彼を待っていたのは、貧困、空腹、精神的肉体的苦痛の連続であった。波止場やパン焼き所での重労働、酒場や娼窟の汚濁、知識青年の秘密集会の喧騒、警察の監視の網の目、——こうしたなかで彼は「私の大学」の課程を学ばなければならなかった。

大学には入れなかったが、この時代の生活——とくに革命的傾向をもった大学生たちとの交際は、ゴーリキイの成長に大きな影響を与えたと見るべきである。日々の生活のための苦闘のなかにあっても、大学生のサークルに出入りして彼らとともに進歩的学者の講義を聞き、学生たちの論争に耳を傾け、そして彼らから哲学や経済学の基礎理論の手ほどきを受け、当時のロシヤで入手できるかぎりの、多くは発禁処分に付せられていた革命的文献に触れることのできたことは、ゴーリキイのなかに幼年時代から蓄積された異常なまでに豊富な、多種多様な生活体験と印象を整理する方向に向かう力を養い、その意味で彼に未来の方向を与えたと言つてよい。⁽³⁾「肉体的には私はニージニイ・ノーヴゴロドで

(1) 《Мои университеты》 С. с. т. 13 с. 513.

(2) Там же. с. 584.

(3) ゴーリキイはカザン時代(1885~89)に関係をもった革命的青年サークルのなかで、読書会・研究会で取り上げた文献として、ラヴロフ=ミールトフ《歴史書簡》、ミハイロフスキイの論文《英雄と群衆》、《農民盗賊団と苦行者》、ア・エヌ・バツハ《飢餓王》、セチェノフ《脳髄反射作用》、カーライル《英雄と英雄的なもの》(抄訳原稿)をあげている。(письмо И. А. Груздеву, 12 марта 1936, С. с. т. 30, No. 1188.) 自分で読んだものとして、《共産党宣言》、《資本論》第一巻、ゲ・プレハーノフの《われらの不一致》、ベリーンスキイ、ドブロリユーボフ、チェルヌイシェフスキイ、ピーサレフ、トカチェフの諸論文、ヴェルヴェ=フレロフスキイの《社会主義ABC》その他、農村共同体や協同組合に関する人民主義理論の文献、文学作品ではニコライ・ウスパエンスキイ、レシェートニコフ、レヴィトフ、グレープ・ウスパエンスキイ、ズラトヴラーツキイ、ザソデムスキイ、バージン、カローニン=ペトロパーヴロスキイ、マーミン=シビリヤーク等、主に人民主義文学の作家の名をあげている。((《Беседы о ремесле》 О литературе. с. 347) このほかサルツイコフ=シチェドリーンやレスコフの諸作品もある。(Там же. с. 348).

生れた。しかし、精神的には——カザンであった。カザンは——私の「大学」のうちでもっとも愛するものである。⁽¹⁾ 勿論、当時の彼の教養と、彼の知性発達の自然成長性の傾向から判断して、この時期の学習がすべて即座に消化されたとはいえられぬし、サークルの構成が多くは現実の歴史的進展の方向からずり落ちた人民主義者の残党から成っていたことも見落してはならない。この時期に養われた力が充分に発揮されるためには、ゴーリキイは以前より倍加された苦難の道を歩まねばならなかった。ずっと後になって、「80年代のサークルでは何が、どんなふうに教えられたか？」という質問にたいして、ゴーリキイはこう答えている。「私にはサークルの授業に規則的に出席するだけの時間がなかった……それでも私はサークルとある程度の関係はあった……多分、私のようなタイプの青年にとりわけ特徴的な、深い影響を残したのは、文学と人生の矛盾、書物の教えと直接経験との矛盾であったと思う。⁽²⁾」

文学と人生、書物の教えと直接経験——この矛盾は同時に、当時のゴーリキイにあっては、彼が接触をもち彼を「教育」する知識人の世界と、彼が生活し実感する人民大衆の世界との矛盾、断絶、越えがたい深淵の知覚でもあった。革命を希求する知識人の小集団にとっては、「人民は英知と、精神美と、善良との化身であり、すべての美なるもの、正義なるもの、崇厳なるものの原理の所有者であった。私はこのような人民を知らなかった。大工や、荷揚げ人夫や、石工を見、ヤーコフや、オシープや、グリゴーリイなら私は知っていた。だがここでは、まさしく同質の人民について語られ、自分をどこかそれよりも低いところに、その意志へ従属する位地においていた。⁽³⁾」だがこれほど人民への奉仕を唯一の願望とし、人類愛の原則によって理想社会を実現しようと念願する「人民崇拜者」=学生たちは、彼らの理想に共鳴し、僅かばかりの商売の収益を彼らに提供する、一人の自覚せる「人民」（アンドレイ・デレンコフ）にたいする

(1) Беседа с М. Горьком, записанная Н. Шебуевым. «30 дней». 1936. No.8. с.77.

(2) «Беседы о ремесле». О литературе. с.493.

(3) «Мои университеты». С. с. т.13. с. 538.

態度は、主人が下男に示すそれである。ペシコフについての「はえぬきの人民の子」という評価は、かえって彼を自己不信と孤独の袋小路へと追いつめる。そして一方、学生たちの世界とは「忘却の壁」でさえぎられたパン焼き所では、彼らの理想の化身であるはずの職人たち＝無自覚の「人民」は「つまり——教育のある連中は俺たちよか悪いんだ！」という確固たる信念をゆるぎなく保持している。

1887年12月初旬、カザン大学の学生騒動が始ったとき、⁽¹⁾「私はパン焼きたちが学生を打ちに大学に行こうとしているのを知った。

——分銅で殴ってやるんだ！——と彼らは愉快的悪意をこめて言った。

私は彼らと論争し、彼らを罵倒し始めた。しかし突然ほとんど恐怖をもって、私には学生たちを擁護する希望^{のぞみ}もなく、言葉もないことを感じた。⁽²⁾この怖ろしい裂目の真只中に身を置くペシコフは、絶望的哀傷にもだえ悩みながら、「三つの言葉で、無限にそれを繰り返しながら、私は考えた。

——おれは どうしたら いいんだ？」⁽³⁾

この事件の一週間後彼は自殺をはかった。⁽⁴⁾さいわい、弾丸が急所をそれた

(1) 1887年12月4日のカザン大学における学生騒動には В. И. Урядов (レーニン) も参加した。学生たちは「高等教育施設への進学を困難ならしめている身分制およびあらゆる種類の障碍廃止」を要求する要望書を学長に手交したが、このなかにはこう述べられている。「われわれをしてここへ集合せしめたものは、全般的にはロシア生活が、なにかなく学生生活がそのなかに置かれている一切の条件が許し難いことの自覚にはかならず……」学区監督官はこの騒動に関係した学生に関する視学の調査書類により、ウリヤノフを含む39名の学生の除名を大学管理機翼に勧告した。大学側はこれを受け入れた。処分を受けた学生たちは逮捕され、カザンから秘密監視のもとに追放された。学生たちは出発に先立ち、「さらば、カザン！さらば大学よ！」という宣伝ビラを発表した。(«Студенческие годы В. И. Ульянова-Ленина»)

(2) «Мои университеты» С. с. т. 13. с. 584.

(3) Там же. с. 585.

(4) 「自殺未遂」について、1887年12月14日附の«ヴォルガ報知»には次のように報じられている。「12月12日午後8時、ニジェゴロドの職人組合員アレクセイ・マクシーモフ・ペシコフは……自己の生命を奪う目的で連発拳銃によって自分の左脇腹を射撃した。ペシコフはただちに病院に送られ治療を受けた。傷は医師によって重患と認定された。発見されたる遺書のなかでペシコフは彼の死に関して何人をも非難せざるよう望んでいる。」(«Волжский вестник» 14. дек. No. 325; В кн. Н. Калинин. Горький в Казани. с. 61)

め生命を取り止めることができた。この自殺の原因のうちには、精神的悩みのほかに、永い年月にわたる極度の生活的窮乏と過度の労働が生んだ肉体の消耗も含まれるであろう。しかしそれよりはるかに大なる程度に、暗黒のなかで光明を求め、「理性的な、善良な、永遠的なもの」をロシアの地に種播き人生を改造しようと願いつつ、それをなし得ぬ焦燥が自分の無能と無用さの断定に直結し、——しかも、人民の深奥部から生れ出た新しい個性の、新しいインテリゲンツィヤの萌芽として、古い時代のインテリゲンツィヤのなかにも、まだ覚醒しない人民大衆のなかにも自分の立つべき場を発見できぬ寂寥感が彼の生への意慾を蝕ばんだと考えられる。この当時の生活を回想して、ゴーリキイは書いている。「私は生活の低俗さと惨酷さとにたいする恐怖をつぶさに体験してきた。私はついに自殺をころみさえした。しかしその後、幾年ものあいだ、この馬鹿げた行為を思い出しては激しい恥ずかしさと自己への侮蔑を感じるのであった。

私がこの恐怖から解放されたのは、人々が意地悪であるよりはむしろ無知なのであること、私を恐怖させるのは彼らでもなければ生活でもなくて、私が自分の社会的その他のあらゆる無知によって、生活にたいする自分の無防禦、非武装によって、脅かされているのだということを理解したのちのことであつた。実際そうである。だから諸君はこのことをとくによく考えなければならぬと私には思われる。というのは、諸君の周囲の誰かれの恐怖や呻きや愚痴もまた、愚痴屋たちが生活にたいして感ずる無防禦感と、「古い世界」がそれによって外部からも内部からも人間を圧迫する一切にたいする自己の斗争能力への不信の結果にほかならないからである。⁽¹⁾」

自殺失敗後の倦怠と自失の状態にペシコフがあつたとき、彼の前に——この章の冒頭に引用したコロレンコの言葉のなかで言われた——ロマーシが現われた。

ロマーシは、70年代の末にキーエフの鉄道で注油夫をしていたが、人民主義

(1) 《О том, как я учился писать》, О литературе, с. 319.

の宣伝活動に参加して検挙され、80年に東部シベリヤに流された。1881年に、暗殺された皇帝にかわってアレクサンドル Ⅲ 世が即位したさい、政治囚に要求された宣誓を拒否したため、イルクーツク州に流された。ここにはまったく同じ理由で流刑になったコロレンコがいて、二人は相当緊密な親交を結んでい⁽¹⁾る。その後1884年に刑期を終え、二人が相前後してロシヤに帰ってきた。コロレンコはニージニイ・ノーヴゴロドに住んで、ただちに活潑な創作のおよび社会的活動を始めた。一方、ローマシは初めキーエフに戻るが、まもなくクラスノヴィードヴォ村に移住して、ここに小店を開いて地下運動のための資金調達を助け、農民のあいだに革命的宣伝を始めていた。

ローマシは、カザンの学生や労働者のサークルにも出席し、そこでペシコフを知って特別な注意を向けていた。ローマシはおそらく、ペシコフのなかに、ともに「人民の出」であり独学の道を歩む人間としての共通性を、知識人社会と人民大衆との乖離の知覚からくる疑惑と不満への共感を見てとっていたのだろう。精神的危機を深刻に体験しつつあったこの青年のなかに勇気を吹きこみ、ふたたび「たたかいの人生」に生き抜こうとする意慾を蘇生させることは、学生たちがペシコフにたいするそれとは異なり、自覚した人民の連帯的責任としてローマシに把握されていたのである。1921年、ゴーリキイはローマシについてこう回想している。「彼はいま生きているだろうか？ 私は知らない。私は多くのことを彼に負っている——私が自殺をはかって自分の肺を射ち抜いた直後、彼は自分のいるクラスノヴィードヴォへ招んでくれた。当時の私の知人のすべてのなかで、彼一人が私に注意深く、真面目に対していてくれ⁽²⁾た。」

(1) Ромась, Михаил Антонович (1859~1920)についてコロレンコは『わが同時代人の歴史』第Ⅳ巻第1篇12章において彼との流刑地における交際をとりあげ、彼の独特な個性、とくに独力で身につけた立派な教養とねばり強い性格とを強調している (см. В. Г. Короленко. Собрание сочинения. т. 8, с. 272~277. Изд. «Правда», М. 1953)。90年代中葉の短篇小説『画家アルィモフ』のなかでも、コロレンコは「町人ローマヌイチ」の名でローマシを登場させている (Там же. т.3)

(2) Сб. «Революционный путь Горького» 1933. с. 41. Арх. Г

こうして——アレクセイ・ペシコフの「大学」の後期課程が始まった。ロマーシがコロレンコに、ペシコフのことを手紙に書いたのもこの時期と思われる。⁽¹⁾

クラスノヴィード²における生活の第一日目を想い、真夜中までつづいた長い対話に想いを馳せながら、ゴーリキイは書いている。

「初めて私は本当に人間であるというよろこびを感じた。自殺の試みの後、私の自分にたいする態度は恐ろしく低められ、私は自分をくだらないものに、誰かにたいして罪あるものと感じ、生きているのが私には恥ずかしかった。ロマーシは、おそらくこれを理解したらしく、人間的に、単純に私の前に自分の生活の扉を開いて、——私をまっすぐにした。忘れ得ない日である。」⁽²⁾

ここではゴーリキイは、カザン時代よりもはるかに落ち着いた気持で、多くのものを読んだ。ロマーシの蔵書はとくに科学的性格のものが多く、ゴーリキイにとって人類の理性的発達⁽³⁾の歴史についての体系的把握の可能性を与えるものであった。

ゴーリキイが農民のなかで生活したのはこの時が初めてであったが、ロマーシの指導のもとにあったことは、ロシヤ農村における資本主義的関係の実態および「百姓」の階級本性について「人民派流にではなく」理解するのに彼を助けた。ロマーシ自身は70年代から人民主義者のグループに属していたが、その執拗な理論的探求と実践家としての豊富な体験とによって人民主義の限界をはるかに超えていたものと考えられる。彼は農民を理想主義の眼鏡をかけずに見つめ、彼らの階級的⁴心理の本質を洞察していた。「英知と、精神美と、善良との化身」としての農民に信服し、人民への愛を語って随喜の涙を流す80年代におけ

(1) ロマーシがコロレンコに送った手紙については不明である。

(2) 《Мои университеты》 С. с. т. 13. с. 591.

(3) ロマーシの蔵書について、ゴーリキイは書名はあげていないが、次の著者名を記している：バックル、ライエル、ガルトプール、レッキ、ラボック、テラー、ミル、スペンサー、ダーウィン。ロシヤのものでは——ピーサレフ、ドブロリユーボフ、チエルヌィシエーフスキイ、プーシキン、ゴンチャローフ、ネクラーフ。
(Там же. с. 592)

る人民主義の亜流にたいし、彼は真っ向から否定的態度をとり、こう語る。「あそこ君たちのところでは、学生たちが人民への愛ということを色々謀くっている。俺はそのことで彼らに言いたい、——人民を愛することはできない、と。それは——言葉だけだ、人民にたいする愛とかなんとかいうのは……」

「愛する——というのは、妥協し、寛容し、許すことだ。そいつは女にたいしてこそとらなければならない方法だ。だが人民の無学を黙認し、その頭の迷妄と妥協し、そのすべての卑しさを寛容し、その野獸性を許すことができようか？」

「百姓にはこう教えなければならない。——お前は、兄弟、人間それ自体としては悪くないが、悪い生活をし、自分の生活を楽しみ、よくするためには何もできやしない。獸だっておそらくお前よりは賢く自分のことを心配するだろう。獸はもっと上手に自分を護っている。⁽¹⁾」

ペシコフのクラスノヴィードヴォ滞在は1888年6月から9月まで、——期間としては短かった。警察や土地の有力者に煽動された農民によってロマーシの店は放火され、ロマーシはここでの滞在を断念して立去る。

このときからペシコフのロシヤ遍歴が始まる。彼はまずカスピ海沿岸に行き、ツェリーツィンに立ち寄り、それからグリャーゼ＝ツェリーツィン鉄道の沿線駅で最初は倉庫番、つぎに計量係として約半年勤務した。この間に彼は前年カザン大学で騒動を起して除籍された学生たちと知己になって警察の監視を受けるようになったり、流刑地から帰ってきた人民派知識人の精神的破産の行状を見たりしているが、こうしたことは一時的かつ表面的であるにせよ、彼のなかになんらかの心境の変化をもたらしたと思われる。「ツェリーツィンを去ってから……私は毒々しく諷刺的な詩をつくり、ますます本気に世を呪い、そして農業コロニアの建設を夢みていた。徒歩旅行のあいだに暗い気分は消えたが、コロニアの、2人の善良な同僚と1人の可愛らしいお嬢さんとの共同生活についての夢想は強められ、いつそう鮮明になった。親しい人々と暮す独立した生活、私が自分で耕やし、種播き、自分の両手でその結実をとり

(1) 《Мои университеты》 С. с. т.13, с. 591~592.

入れる生活、支配者がなく、主人がなく、——私がそれに飽き飽きしていた侮蔑のない生活についての夢想を、私は1000ヴェルスタ以上も運んだのである。⁽¹⁾」

クルタヤ駅に勤めていたあいだに、ペシコフは「2人の同僚と1人の可愛らしいお嬢さん」、すなわち電信手のユーリン、ヤロスラフツェフおよび駅長の娘マリヤ・バサルギナとはかつて農業コロニヤの建設を計画し、当時こうした類いの「自然に復帰する」運動の精神的支柱と考えられていたレフ・トルストイの援助を仰ぐことを決めた。89年4月中旬、トルストイと会見する目的をもってペシコフはツァリーツィンを出発する。しかしトルストイに会うことはできなかった。モスクワに滞在中、彼はトルストイに宛てて手紙を書いている。

レフ・ニコラエヴィチ！

貴方をお訪ねして私はヤースナヤ・ポリャーナとモスクワへ参りましたが、病気でお会いできぬと言われました。

貴方にお手紙を差上げることにしました。用件はこういうことです、Г.
И.^{*} 鉄道に勤務している数人の者が、——このなかには貴方への手紙を書いている者も含みます、——自立的個人労働の理念と農村生活に心惹かれ、農業に従事することを決めました。しかし、われわれ全部の収入は月平均30ルーブリ程度あるとはいえ、われわれの有する貯蓄は僅少です、これが経営設備に必要な額にまで殖えるまでは非常に永い期間待たなければなりません。

そこでわれわれは、貴方のご援助におすがりしようと決心しました。貴方のところにはまだ耕作されていない土地がたくさんあるとか伺っております。その土地をすこしだけわれわれにくださるようお願いいたします。

なお、純粋に物質的な援助のほかに、精神的援助を、われわれの目的の成功的達成を容易ならしむるであろう貴方のご助言とご指示をくださいま

(1) «Известия» от 28 Марта 1953 года. А. Волков. «Великий основатель социалистического реализма»

すよう、また《懺悔》、《わが信仰》その他、市販されていない書物をわれわれにくださることを拒まぬよう希望します。

われわれの試みがどのように貴方には思われましても、——貴方の注意と指示に価いするか、あるいは空虚なる狂人じみたものであるか、いずれでありましようとも、——われわれにぜひご返事をください。このことは貴方の時間をすこしだけ奪うことになります。もしもわれわれと、そしてわれわれによってこの計画実現のためになされていることとを、もっと親しく知るほうがよいとお考えなら、われわれのうちの2名もしくは1名が貴方のもとにお伺いすることができます。貴方のご援助を期待します。

一同に代って——ニジェゴロドの町人

アレクセイ・マクシーモフ

ペシコフ

4 月 25 日

(1)

この手紙にたいするトルストイの返事があつたかどうか不明であるが、いずれにせよ、ペシコフたちの「農業コロニー」は実現されなかった。この手紙を書いてから1週間乃至2週間後にはペシコフは、未来の輝やかな共同生活を夢みる鉄道員の仲間たちのところにではなく、ニージニイ・ノーヴゴロドに帰っている。

故郷についた彼はすぐにカザン時代に知り合った С. Г. ソーモフをたずね、警察の秘密監視下にあつた彼と「共産主義原理」による生活を始める。ビール工場で働いたりクワスの行商をしながら、ふたたび彼は革命家たちのサークルに関係し、さまざまなイデオロギー的屈折をもつ知識人たちと親交を重ねる。カザン時代とちがって、ここではペシコフはサークルのなかで一方的に「教育」を受ける生徒としてではなく、なんらかの運動の実際的な任務を受け持っていたと考えられる。このことに関しては、町の憲兵司令部の報告書のなか

(1) Л. Н. Толстой への書簡. С. с. т. 28, No. 1.

* Г. Ц. 鉄道—Грязе-Царицынская железная дорога.

に次のように記載されていることから、ある程度は推測されよう。「召喚を可能ならしめる理由に関しては……ニージニイ・ノーヴゴロドからカザン（ここでもやはりペシコフは、政治的に真に危険かつ不隠な傾向をもつ分子のグループに恒常的に出入りしていた）へのペシコフの数度の旅行は、彼がニージニイ・ノーヴゴロドとカザンに居住する危険分子相互の秘密連絡の仲介者であったことを疑わしむるに充分である。⁽¹⁾」

この年の10月、カザン地方でマルキスト・グループが検挙されると同時に、各地の革命家のグループの追求が始った。ペシコフと同居していたソーモフと彼のグループは逮捕寸前に逃走したが、ペシコフは「ソーモフ隠匿」の嫌疑で家宅搜索を受け憲兵司令部に拘置されることになる。数日後彼は釈放されたが、ここで風変りな憲兵司令官、ポズナンスキイ少将を知る。將軍はペシコフが詩作していることを知って彼の才能を認め、こう忠告する。

「この通り——あなたはものを書いている。いや、よろしい。わしがあなたを放免するとき、あなたの原稿をコロレンコに見せなさい。彼と知合いかな？⁽²⁾ 知らない？ あれは篤実な作家だ。ツルゲーネフに劣らない……」

すでにペシコフはこの町に戻ったときから、コロレンコの存在を知っており、街路でその姿を見かけたこともあったが、コロレンコと知合いになりたいという希望は「憲兵將軍が私に忠告を与えた——それはロシヤの奇妙な生活の面白い小喜劇のひとつであったが——その後でもそんな希望は起らなかった。」とゴーリキイは書いている。そしてこの時からひと月以上もたってから、やっとコロレンコを訪問することを決心したのである。

2

未来の大作家の最初の習作である叙事詩『古い櫟の歌』（Песнь старого дуба）と数篇の詩は、コロレンコによって柔和で穏やかであるが、きびしい批判を受けた。この叙事詩についてゴーリキイはこう書いている。「自分がす

(1) «Рев. путь Г.» с. 21, Арх. Г.

(2) «Время Короленко» С. с. т. 15, с. 11.

ばらしいものを書いたと心から思いこんでいた——私はその作品のなかへ、変転にみちた苦しい10年間に自分が考えた一切をつめ込んだのである。それで私は、学問のある人々が私の叙事詩を読んで、私が語ったすべてのことの新鮮さに有意義に驚嘆し、私の作品の真実が地上に住む人々の胸をゆさぶり、その後ではすぐにも堅実な、清らかな、楽しい生活が始まるのだと確信していた——それ以外のこと、それ以上のことを私はなにも望まなかった。⁽¹⁾」ところが、コロレンコはいささかも驚嘆の色を示すことなく、叙事詩のなかにある「書き違い」、文体の奇妙さを指摘したのである。コロレンコの批評は落雷のようにペシコフに作用した。彼は「もう何も聞かず、何も理解せず、ただこの恥辱から逃げることだけを考えていた。」このあと彼は庄しひしがれたような気持で数日をすごす。

2週間ほどたって、コロレンコは人を介して原稿をペシコフに届けた。「《歌》によってあなたの才能を判断することは困難です。しかし才能はあるようです。何か自分の体験したことを書いて、私に見せてください。私には詩の評価はできません。あなたの詩は私には解りませんでした。もっとも、力強く、明解な個所もありましたが。 Вл. コロレンコ」⁽²⁾

原稿の内容について何も触れていないことが、ペシコフを奇妙な困惑につき落した。また、「体験したこと」を書くということの、ほんとうの意味も理解しかねた。なぜなら、叙事詩のなかにある一切は「苦しい生活のなかで考えたこと」、つまり彼にとっては生活の個々の印象や記憶よりもはるかに強く「体験したこと」にはほかならないからである。それにもまして彼を絶望的なまでに悲しませたのは、彼自身でさえ「自分のちいさい祕密」として、これまで誰にも見せなかったし、コロレンコにも見せる気の毛頭なかった2篇の小詩が偶然に原稿にまぎれこんでいて尊敬する作家の眼に触れてしまったこと、温厚で、思いやりのあるコロレンコですら「あれは、たわごとだ。」と語ったということ

(1) 《Время Короленко》 С. с. т. 15, с. 6.

(2) Там же. с. 16.

である。そしてペシコフは原稿も、詩を書きつけた紙片も火中に投じてしまうのである。「私はもうこれ以上、詩も散文も書くまいと決心し、実際、ニージェニイで暮しているあいだじゅう——ほとんど2年間——何も書かなかった。」⁽¹⁾

事実、このときから出世作『マカール・チュードラ』発表まで、ゴーリキイはまとまったものを何一つ書いていない。しかしこれは彼が自分の才能に絶望したゆえとばかりは考えられない。むしろコロレンコの批評を反趨することによって、気晴らしや慰みでない、ほんとうの文学に近づく道をまさぐり、生活体験の多様な印象と思索のなかから何をひき出し、いかに形象化するかを注意深く、慎重に考えるための停止であったのだ。もちろんコロレンコの批評は若い「作者」の自尊心を傷つけたかも知れない、しかし、30年ほどたってゴーリキイが回想するように、「コロレンコは初めて私に、形式の意義について、語句の美しさについて、なるほどとうなづける人間の言葉で語った。その言葉の簡潔な、わかりよい真実に私はおどろかされた。そして、彼の言葉を聞きながら、作家という仕事が容易な仕事でないことを空恐ろしく感じたのであった。」⁽²⁾

ニジェゴロドの2年間のあいだに、ペシコフがひんぱんに接していたのは、「急進派人民主義者」といわれる人々であり、この人たちはコロレンコを中心とするサークルにたいしては敵意をもっていた。この町はカザンとならんで、中央都市——シベリヤ間の交通の要衝にあたり、政治犯が流刑地に送られるときも流刑地からロシヤに帰ってくるときも、ここを足溜りにした。したがって釈放された「政治的危険分子」がこの町にきて、そのまま居つく比率も大きかったのである。このような経路を辿ってきた「政治家」たちや、19世紀ロシヤ全体を通していつの時代でも生活変革について特権的に主張した知識青年たちのサークルで、彼らの思いつきの、美文的な演説を聞きながら、この時期のペシコフはもはや知識人への疑惑を内向的に自分のうちにもやもや蓄積させるよりは、むしろ積極的に「先生」たちに反論するところまで成長していた。「私の先生たちは、彼らに気に入ったこと、《イデオロギー的に》彼らに

(1) Там же. с. 17.

(2) Там же. с. 16.

合致したものを私に言い聞かせようとした。私は強制にたいして自分を守るはかなかった。そしてそれゆえに私は先生たちに好意をもたれなかった……彼らの反感は私としてすこぶる利益⁽¹⁾になった、彼らは私とほとんど対等で議論したから。」

サークルにおけるペシコフの立場と態度については同時代人の回想がある。どこからか1人の「非合法」人民主義者がやってきて、農民の革命的気分に関する演説をおこなった。「ペシコフもまたこの場に顔を見せ、注意ぶかく聞いていた。そして《非合法》が話を終え《討論》が始まると、自分の番を待ってペシコフも話しだした……彼の話し方は他のすべての人々と全然ちがうようだった。みんなは眠気をもよおすような面白くもない、抽象的な論議で自分の言葉をみだしていたが、ペシコフは生き生きとした形象でもって語った。彼の話には強烈な、生活の匂いがぶんぶんする言葉と適切な性格描写とを備えていて、すべてが活気づき、沸きたち、息づいていた……若い人のこの話し方はみんなには気に入らぬらしかった。《急進的》気分の人たちはこの話し方を幾分異端的なものとさえ見ていた。しかしそれでも、みんなは彼の話を注意ぶかく聞いていた……そのような場合、ペシコフの顔付はすっかり変ってしまうのだった、——このことを私はその後しばしば確かめた。⁽²⁾」

後年ゴーリキイは、自分が学校的思考訓練を受けなかったことを、ひとつの重大な欠陥として率直に認めている。しかし、実生活との交流のない学校的訓練はそれ自身のなかに重大な欠陥を含むことがある。理論と実際とが矛盾した場合、それは往々にして実際を歪めることによって理論的完璧を保とうとする。19世紀後半のロシアがすでに資本主義的発達⁽³⁾の道を歩んでいたときに、資本主義の腐敗的病毒は「百姓の社会主義的ルーシへは決して——決して、——浸透することがない」という人民主義の理論的確信が、教条に忠実な知識人たちをして現実の資本主義的諸関係に眼をふさがせ、それらを例外的現象として切り捨てさせるのである。このような人々の影響を強く受けながらも、ペシコフは

(1) 《Беседы о ремесле». О литературе. с. 490.

(2) И. Груздев. ГОРЬКИЙ. с. 63.

生活体験と生活のなかでの思索とによって人民派の理論に同意することを妨げられ、この派の知識人たちよりもはるかに広い現実を観察していた。だから彼は、彼がもっていない理論的帰結のかわりに、充分にもっていた生活のなまなましい印象によって報告者の理論に反駁したのである。上記の引用文によっても、彼の話し方が当時においてすでに卓抜した表現力によってきわだっていたことが理解される。頭では反撥しながらも、「みんなが彼の話を注意ぶかく聞いていた」という証言が事実であるとすれば、話の内容の真実性によってばかりでなく、その観察の鋭さ、その表現の豊かさによっても人々の心を惹きつけたのであろう。とくに彼が「生き生きした形象」で話したということは、彼のなかに芸術家の萌芽が育ち始めていたことを示している、芸術家の言葉とははかならぬ形象なのだから。

とはいえ、ペシコフはいまだ周囲の人々に自分の見解の正しさを説得し、信服させるまでの力をもたなかった。いや、むしろ自分の意見を形づくるよりも、周囲の意見の氾濫から自分を守りとうすことに精一杯であったろう。この時期、89年から90年初頭にかけて、ロシアではさまざまな新思潮が堰を切ったように社会の表面へいっせいに噴出した。合法マルクス主義が、エゴイズムが、ニーチェ主義が、モデルニズムが青年たちを熱中させた。これらの思潮はたがいなぶつかり合いながら、「ヒロイックな時代の遺訓」にたいする攻撃においては一致していた。

「矛盾対立し、ますます鋭く敵対的になってゆく意見の渾沌のなかに、理性と感情とのたたかいを見まもりながら、——真理のほうが目散に逃げだすか、それとも不具になって敗退するかにちがいないと私には思われたこれらの決戦のなかに、思想のこの沸騰のなかに、私は自分の《気持にびったりする》ものを何も見いださなかった……。カザンや、ボリソグレープスクや、ツァリーツィンでと同じように、ここでもまた私は知識人の生活を観察しながら、疑惑と不安を感じていた……。私にはまたわからなくなった——人々の空虚な生活は全然無益なものに思われ、その精神的貧困と、驚くべき退屈さと、とくに人間相互の関係における平然たる残忍さによって私を憤激させているのに、なぜ

知識人はその人々の大衆のなかへ入りこんでゆくもっと精力的な努力をしないのであろうか？……⁽¹⁾」

ゴーリキイにとってロシヤ生活の道を自分に説明し、理性的労働の意義を示すことのできる唯一の人と思われたのは、コロレンコだった。しかし、若い多感な青年にはコロレンコが近づきがたい存在のように思えて、気軽に彼を訪ねることができなかった。

「私はウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチのところへ足を向けなかった。というのは、すでに述べたように、私はものを書く試みをきっぱりと断念したからである。私はただときおり、路上や、知人の家での集りで、ちよつと彼に会うだけであった。そのような集りでは、彼は寡黙で、しずかに論争に耳を傾けていた。彼の平静さは私の心をゆすぶった。私の足もとではすべてが揺れ動いていたし、私のまわりでは——私にはそれがよくわかったのであるが——ある醗酵が始まろうとしていた。誰もが興奮し、論争していた——この人はいったい何の上に立っているのであろうか？ しかし私は彼に近づいていって、

「なぜあなたは平静なのですか？」

と訊ねる決心はつかなかった。⁽²⁾」

1890年の夏の夜、ヴォルガ河の上にそそり立つ断崖の上で、ペシコフはコロレンコに偶然出会った。永いあいだペシコフの心にわだかまっていた疑問に、コロレンコは答える。

「私は自分が何をしなければならないかを知っています。そして自分のやっていることの有益さを確信しています。⁽³⁾」

コロレンコの答はこのように単純明快であった。コロレンコは80~90年代の民主主義的知識人の最もすぐれた、最も才能ゆたかな代表者の一人であり、専制権力にたいする熱心な執拗な斗士であった。芸術家、評論家、社会活動家のどの領域でも一流であった彼は、その全力を専制政治とのたたかいに捧げてきたし、このたたかいの必要性和最後の勝利とをゆるぎなく確信していた。しか

(1) «Время Короленко» с. 20.

(2) Там же. с. 19.

(3) Там же. с. 27.

も、同時代の知識人の多くのような空疎な熱弁と一時の発作的ヒロイズムに陶醉することがなく、コロレンコは「崇高、遠大な」目的を身近な社会的諸課題の解決を固く結びつけて、たたかいを進めた。官庁や悪商人の不正をあばき、弾劾し、無権利の人民の利益を擁護し社会問題への関心をかき立てながら地味だがねばり強く、偉大な理想実現のために必要な布石を彼はおこなったのである。彼は尖鋭な階級斗争による急激な社会変革よりは、長い見透しのなかで徐々に変革する方向を選んだ。この点でゴーリキイとは一致しなかった。しかしそれだからこそ、80~90年代初頭の「沈滞期」にも、20世紀初頭の反動期にも、革命勢力が敗北し組織が潰滅もしくは弱体化しその上を反動の暴風が吹きすさんでも、コロレンコは自分の信念と仕事の有益さとをいささかも疑うことなく、自分の仕事をひとつひとつ積み重ねることを一瞬たりとも放棄しなかった。それゆえに、彼とは思想・信条において異なるルナチャールスキイのような最も尖鋭なマルクス主義者が、彼を「ロシヤの義人」と呼んで、深く尊敬したのである。だが、いま、未来への道を模索する青年を前にして、コロレンコは本当の知識人とはなにか、知識人がいかなる点で人民に役立ちうるか、いかなる点に彼の長所があるかを説明し、自分の生活の目標を打ち明ける。

「必要なのは正義です。それが小さい火の粉をすこしずつ蓄めていって大きな火になるとき、その火は地上のありとあらゆる嘘と穢れを焼き払ってしまいます。そして、そのとき初めて、生活はその苦しく悲しい形を変えるのです。撓まずに、自分の身を惜しむことなく、誰をも、なにものをも惜しむことなく、生活のなかへ正義をもち込みなさい——そう私は思います。」⁽¹⁾

ゴーリキイにとってこの忘れがたい対話のあと、別れぎわにコロレンコは訊ねた。

「——どうです——書いていますか？」

——いいえ。

——どうしてです？

——時間がないので……

——残念です。でも、それは理由になりません。やろうと思えば、時間は

(1) Там же. с. 30.

見つかるはずですが。私は真面目に考えるのですが、あなたには才能があるようです。あなたは気分がよく落ち着いていないんですよ……」⁽¹⁾

アレクセイ・ペシコフは、天性のすぐれた資質と、苦難の生活とから早くから「人間をつくるのは環境にたいする抵抗」であることを知っていた。そして彼は、青年らしい情熱と生活に裏づけられた強い意志とで理想的生活の建設へと導く道をたゆまずさぐりつづけてきた。だが、彼の体験した生活の、過度に刺激的で強烈な印象の山積は、23才の青年にとっては統一・発展の方向へそれを整理するどころか、それらの印象の矛盾・相剋にたいし自分の姿勢を定めるべく全力を傾注して対決するので精一杯であった。——彼の気分がよく落ち着いていないのは当然のことである。

かくて「理論」の氾濫するこの町を去って、ロシヤをめぐり、ロシヤの民衆を知りたいという止みがたい渴望が彼のなかに湧く。人民主義者のサロンにおける人民ではなく、日々の労働で汗と泥にまみれる生きた人民を知りたいという渴望が。

「幼年時代と少年時代に私は、おそらく、屈辱の苦さをあまりに多く経験し、苛酷さ、悪意ある愚かしさ、無意味な嘘をあまりに多く見た。心にのしかかる早すぎた重荷は私を圧迫した。私には生活のなかに、人々のなかに、心にのしかかる重苦しさや釣合うことのできる何ものかを発見することが必要であった、自分をまっすぐにすることが必要であった。」⁽²⁾

こうして彼の遍歴が始った。これは1891年4月のこと。コロレンコとの交際はそれ以来しばらくとだえた。

「私はニージニイを去り、そしてほとんど2年間浮草のようにロシヤの町々をさ迷い歩いた。ヴォルガ沿岸、ドン、ウクライナ、カフカースを通りすぎ、数えることのできないほど多くの様々な印象・冒険を経験した……」⁽³⁾

この旅行はほとんどが徒歩でなされた。ドン曠野の村々では農家で日傭いを

(1) Там же. с. 31

(2) «Герой». С.с. т.11, с. 311.

(3) «О первой любви». С. с. т. 15, с. 103.

し、オデッサ、ロストフ＝ナ＝ドヌでは港湾で荷揚人夫をし、ドニエプル河口では漁師たちと暮し、塩田で働き、ベッサラビヤではジプシーの群にまじり、ノヴ・ロシースクでは道路工事で働いた。ここからカフースへ足をふみ入れ、チフリスで革命的労働者のグループと知り合い、ここにしばらく滞在して女教師たちの日曜学校の企画に参加したり、農民劇場の設立を計画している。

チフリスでの滞在中、ペシコフはその後の彼の生活に決定的な作用を及ぼした人物——A. M. カリュージヌイ⁽¹⁾と親交をむすんだ。彼はこの放浪の青年に就職を世話し、学習をすすめ、のちには自分の住居に招いて、生活の心配なく「体験したこと」を作品化することを助けた。こうして、アレクセイ・ペシコフの第一作『マカール・チュードラ』(Макар Чудра)が生れたのである。この作品はカリュージヌイの奔走によってチフリスの新聞「カフカース」(Кавказ)⁽²⁾に発表されることになった。1892年9月12(24)日である。

この日をゴーリキイは自分の文学活動のはじめの日と考えている。そして「カフカース」の編集部が短篇小説の採用を決定した瞬間、ペシコフは表題の下に「Максим Горький」と署名した。これは作者の重苦しい生活にたいする苦悩を物語る「辛いつらいマクシム」という意味をもつ。すなわち、マクシム・ゴーリキイがこの日誕生したのである。

3

1892年10月、ゴーリキイはニージニイ・ノーヴゴロドに帰った。ここで前に

(1) Александр Мефодиевич Калюжный (1853~1939), 《人民の意志》派の革命家。徒刑ののち、チフリスに住んで労働者のあいだで宣伝活動をしていた。ゴーリキイはのちに彼について次のように書いている。「こう書いてください; ゴーリキイの最初の先生であったのは——兵士で料理人のスムールイ, 2番目は弁護士ラーニン, 3番目は《社会の外》の人間カリュージヌイ, 4番目はコロレンコである。」(В жур. «Семья», 1899. No. 36.) 「あなたにお会いできるとはなんと嬉しいことでしょう, アleksандол・メフオーヂェヴィチ! ……私はおよそ9年間もあなたにお会いしなかったが, しかしあなたとともに経験したことのすべてを私ははっきりと記憶しています。そして, ほかでもないあなたが初めて, 私がいま歩いている道へ私を押し出してくれたことを, けっして忘れていません。」(1900年6月2日付のカリュージヌイへの書簡. С. с. т. 28, с. 122).

(2) 括弧のなかの数字は新暦を示す。

も勤めたことのある弁護士ラーニンのところで、ふたたび書記として働くことになった。

ゴーリキイが後に論文や作品でしばしば語っているところから考えて、この時期には専門的作家として立つべく、多くの詩・散文が書かれていたと思われる。しかし、最初の短篇『マカール・チュードラ』発表以後、ほとんど一年にわたって、彼の作品はどこにも発表されていないのが事実である。

おそらく、「生活印象の雑然さと重苦しさ」という、青年時代から作家生活に入ってからかなり後まで尾を引いたとみられるこの精神的負担が、とりわけ作家的出発期の彼にとって、創造上の大きな障碍になっていたのであろう。豊富な体験はいまだ必要な形式に整理されぬ状態にあったのである。詩から寓話へ、寓話から風俗的物語へ、さらに伝説へ、放浪生活を扱った自伝的小説へ、幼年時代の回想へと題材と形式とを移行させながら、若き作家は文学のあらゆるジャンルでの習作を試みていたのであろう。

この時期、夜ごと、裁判の記録や、上告・控訴などの書類を清書したのち、「ある不思議な自己忘却の熱い波の氾濫」を胸に感じながら、ゴーリキイがどれほどの作品を書き、そして火中に投じたか、われわれは知ることができない。『マカール・チュードラ』発表後にゴーリキイが書いた芸術的習作としてわれわれの見ることのできる最初のもは、チフリス滞在中に書かれた『ちいさい妖精と若い羊飼いの話』(О маленькой фее и молодом чабане)を除けば、1893年4月5日の日付のある伝記的素描である。これは、ソ連におけるゴーリキイ研究者たちの証言によれば、⁽¹⁾当時のごく普通の学校用ノートに28ページにわたって書かれたものである。

この伝記的素描は次のように意味深長な表題をもっている。

ИЗЛОЖЕНИЕ

ФАКТОВ И ДУМ, ОТ ВЗАИМОДЕЙСТВИЯ КОТОРЫХ

(1) Н. П. Белкина. Проблема положительного героя в автобиографической трилогии Горького. В кн. «Горьковские чтения» 1949. изд. АН-СССР. с.97.

ОТСОХЛИ ЛУЧШИЕ КУСКИ МОЕГО СЕРДЦА⁽¹⁾

(私の心の良き断片^{きれぎれ}がそれらの相互作用のために枯れ落ちたところの、
事実と思索の記述)

『記述』の冒頭に、「アデーリヤ、／ どうしてお前は、私のいうことをなんでもかんでもそんなにひどく邪推するんだね？……（ドイツ小説より）」、「わずかに味よき蜂蜜となにやらとを味わいて、——われはみまかりぬ（古謡Ⅱ）」という二つの題詞が掲げられているように、この草稿の内容は自嘲的色彩が濃厚で絶望的なまでに暗いかげを帯びている。ここには後の『幼年時代』の数章に一致するいくつかの場面が断片的に、「思い出の刻印」として描かれている。もちろん、これを『幼年時代』の初稿もしくは下絵と考えることは正しくないであろう。これは多くの点で後年の作品とはいちぢるしく矛盾している。しかし、文学的に熟考され整理されたものでなく、作者がほとんど発作的な衝動に駆られて、ごく短期間に書いたであろうそのために、『記述』はこの時期の作者の内面世界をいっそう赤裸々に示すものとなっている。このなかで作者は語っている。——自分がこの世に生れ出たのは性悪な自然の気まぐれないたずらの結果であり、産声は「不満と抗議の叫びであった」と考える。父の死んだ日に生れた弟のマクシムは、1週間後には世を去ったが、この行為は「彼が非凡な、きわめて明敏な頭脳を所有していたことの証明」である。早く他界した父についてはほとんど記憶がないが、「私なら、きっと、自分の子供たちにもっと多くを残すだろう。いずれにしろ、私の罪によって（ぎりぎりのところで半分は）子供たちが生存すべく運命づけられたことについて、彼らの前に許しを乞うことを忘れはしまい。」「神様には申訳ないけど、わたしはアレクセイを愛せないの。だってマクシム（私の父）がコレラにかかったのはあの

(1) 《Изложение……》はゴーリキイの遺稿のなかから発見され、1940年にゴーリキイ記念世界文学研究所の論文集《Горьковские чтения》に初めて発表された。
М. Горький: С. с. т. 1 に収録されている。

子のせいじゃなくって？ いまのいま、わたしの手足を縛っているのはあの子じゃなくって？ あの子さえいなけりや、わたしはいい暮しができたでしょうに！」と語る母は、やがて子供を祖父母のもとに残して、若い男のもとへ走る。それから、意地の悪い祖父、酔っぱらいの祖母……若いゴーリキイの脳裡には暗く苦い記憶のみが津波のように押し寄せる。耐えがたい思いに囚われた彼はこの回想を「ストップ！」と断ち切り、題詞の「アデーリヤ！……」に始まるドイツ翻訳小説の文章を20行ばかり書き写して筆を投げている。

1892年の秋、ゴーリキイは「初恋」の女性、オリガ・カミンスカヤとチフリスで再会した。彼のひたむきな思慕にほだされ、カミンスカヤはパリにとどまっている夫と別れる決心をし、12月からニージニイに移ってゴーリキイと同棲し始めた。⁽¹⁾ 5才年長で、過去に永いパリ生活と2度の結婚を経験し、肖像画や製図や服飾の才能と「危険思想」を所有する愛らしい「女学生」であるこの婦人は、「生活の粗野に辱められた心臓」をもつ24才の青年を「母のような寛大な態度と……晴れやかな笑い」とで柔らかく包んだ。こうした新婚生活のなかにあっても、自分の過去の生活をふりかえるとき、ゴーリキイは生活印象の重苦しさに暗胆とならざるを得なかつた。

このような時期に、ゴーリキイの前に援助の手をさしのべてコロレンコがふたたび現われた。1893年5月、コロレンコはまだ「ロシヤの富」(Русское богатство)の編集部には参加していなかったが、この雑誌にたいしては執筆者の一人として協力していた。彼はゴーリキイの原稿を、自分の批評と註釈をつけて雑誌に送り、編集主幹のミハイロフスキイに宛てて書いている。

「同封でペシコフという人の詩をもう2篇送ります。……こんどは詩も人間もはるかに興味ぶかいものです。これは疑いない文学的才能をもち、まだ自分の道を完全には探し出していない独学者です。お送りした詩のうち——最初のもものは形式では弱いですが、画面はよく意味づけられ、確かな詩的ほとばしりがあ

(1) Ольга Юльевна Каминская——この女性についての思い出にゴーリキイは「О первой любви」(С.с. т.15)を捧げている。これについては別の機会に独立した主題として扱いたいので、ここでは多く触れない。

ります。ほかの2篇は——さほど力作でないが、形式からいえば非の打ちどころがないようです。……これらの試作についてのあなたのご意見を伺うことは、作者にとって非常に貴重なことです。彼は《ロシヤの富》へ掲載されることを熱望しています。私個人の気持としても若干の言葉とできるだけ早急の決定⁽¹⁾をお願いします。」

これらの詩篇は紛失されてしまったらしいが、その一つについては次のような同時代人の回想がある。「あるとき、コロレンコは《ロシヤの富》編集部へアレクセイ・マクシモヴィチの詩をニージニイから持ってきた。曠野のなかの一人の浮浪者が描れていた。詩はミハイロフスキイには気に入られなくて、雑誌には載らなかったが、コロレンコはほめそやし、詩を朗読して次の句を強調した。

И встану я, бродяга, на колени……

——だってこれはすばらしいじゃないか！とコロレンコは言った。⁽²⁾

コロレンコは編集部における原稿採否の決定を待たずに、この年の夏に全世界博覧会が開催されたシカゴへ赴くべくロシヤを去った。しかし、アメリカへ去る前にコロレンコはミハイロフスキイにたいし、ゴーリキイに返事を早く出すよう強く要望している。ミハイロフスキイはコロレンコの依頼によって、かねてゴーリキイとも知り合いであるアンネンスキイに宛てて書いた。

「尊敬するニコライ・フォードロヴィチ、В.Г.コロレンコはあなたを通してペシコフ氏に、彼の、ペシコフの詩について答えるよう頼んでいます。どうぞ彼に次のことをお伝えください。彼が届けてくれた詩は失敗

(1) Н. К. Михайловский への書簡より、30 мая 1893. — В. Г. Короленко. Избранные письма. т. 3.

(2) С. Д. Протопопов. В кн. Сб. «Горький» 1928, с. 110 「ニージニイから持ってきた」というのは著者の記憶の誤りであろう。ここで述べられている詩はコロレンコが編集部に送った詩なのである。

作です。最初のもは正真正銘の詩精神につらぬかれているが、しかし形式には非常な欠陥があり、残りの2篇は形式にこだわりすぎて無内容です。

コロレンコは、ペシコフ氏が散文のほうも試みていたと私に言いました。彼に、コロレンコに知られている試作は彼自身も失敗作だと言ってはいましたが、才能については証明しています。何か私に送って見せてくれませんか、ただしすでにコロレンコが見てしまったものではないのを。⁽¹⁾

ゴーリキイがミハイロフスキイに自分の小説を見てもらうために送ったかどうかは不明である。しかしこの時期、ゴーリキイが3篇の短篇をモスクワの日刊新聞「ロシヤ通報」(Русские ведомости)の編集部に送ったことは明らかになっている。そのうちの一つ、『エメリヤン・ピリャーイ』は同紙の213号(1893年8月5日)に発表された。

有力な中央紙に発表の機会をもったことは、彼にとって文筆生活の最初の踏台となった。このときから彼の初期の作品が「ヴォルガ報知」(Волжский вестник)、「ヴォルガ人」(Волгарь)、「サマーラ新聞」(Самарская газета)などの地方紙に次々と掲載されはじめた。

この年の秋、アメリカ旅行から戻ったコロレンコはゴーリキイの訪問を受けて、次のようなよろこびの言葉で彼を迎えた。

「——ところで、私たちはあなたの短篇《マヒワの話》を読んだところです。ねえ、ほら、あなたは作品を公刊し始めましたよ、おめでとう！ あなたは——強情な人らしいですね、あいかわらず寓話を書いておいでだ。かまいませんとも、——寓話も結構、機知に富んでいたらね、強情も悪い性質じゃありません。⁽²⁾」

長い会話の後、ゴーリキイを送り出しながら彼は、さらに大きな成功を望ん

(1) Н. К. Михайловский の Н. ф. Анненский への書簡, В кн. «М. Горький. Материалы и исследования» т.2. с.352.

(2) С. с. т.15. с. 32~35.

でいる、とゴーリキイをはげます。

「——それではあなたは私が書けるとお考えですか？——と私は訊ねた。

——もちろんです！——彼はすこし驚いたように叫んだ、——だってあなたはもう書いていて、発表しているじやありませんか、そうでしょ？ 相談したいことがあったら、原稿をもっていらっしゃい、いろいろお話ししましょう……」

カリュージュヌイはゴーリキイに彼の進むべき道を示したが、コロレンコは地方新聞に発表されたゴーリキイの短篇小説をひとつひとつ批評しながら、この道——文学への道の注意ぶかく経験豊かな先導者であった。コロレンコの忠告や指示は、ゴーリキイが回想するように、単純、簡潔、明快であった。しかもこれは初心の作家が正に求めていた指示であった。「あなたの書き方は実に独特です——とコロレンコは言った、——あなたのものはすべてがきちんとしないのでざらざらしている、しかし——面白い。」

この「面白さ」にたいして中央の大新聞・大雑誌の練達の編集者たちはさほど注意を向けなかったらしく、ゴーリキイの原稿は彼らのために一度ならず「紛失」させられている。

それはともかく、コロレンコは、大きな才能を秘めたこの青年作家が地方新聞の小説欄で朽ちはてぬよう慎重に配慮し、彼の中央への進出のために尽力している。

93年11月14日、コロレンコは「ロシヤ通報」の編集者 M.A. サブリンに宛てて書いた。

「親愛なるミハイル・アレクセーエヴィチ、あなたの《ロシヤ通報》編集部には《マクシム・ゴーリキイ》の2、3の短篇があるはずですよ。そのうちのひとつ、《エメリャン・ピリャーイ》はすでに掲載されましたが、残りのものも掲載されると聞いています。しかし、あなたのところでは文学ものが特別な価値をもつものでないにしても、すでに数カ月経過したのに短篇は現われません。作者は——わがニジェゴロード人です、——そし

て私は、早急の調査とそれらの短篇がとくにいつ発表されるかご返事をいただけるなら、大兄に厚く感謝するでしょう。では、お目にかかれる日まで。

君の Вл. कोरोенко⁽¹⁾

कोरोенコの奔走も空しく、「ロシヤ通報」編集部から原稿は不採用の通知とともに送り返されてきた。 कोरोенコはすぐにゴーリキイに次のように連絡した。

「親愛なるアレクセイ・マクシモーヴィチ、
《ロシヤ通報》から不愉快な知らせがきました。暇をみてお寄りなさい、——お話ししましょう。まだ《ロシヤの富》へ送つていなかったら、——原稿を私のところへ持ってきてください、相談しましょう。一人の知恵もい
いが、二人のほうがもっとよい。

いつでも、——お寄りなさい。

1893年11月25日

あなたの Вл. कोरोенко⁽²⁾

同じ日の日付で彼は弟のイラリオン・ガラクチオーノヴィチにはこのことに
関連し次のように書いている。

「可哀そうなペシコフ！ 私は彼をひどく悲しませることになる。彼に頼まれて私はサブリンに、編集部で受取った短篇をどういうわけでこんなに長く掲載しないのかという質問状を書いたのだ、そして短篇は採用しない、駄作を採用するわけにはいかぬという回答を受取った。短篇自体は私に送り返された、——そしてサブリンはそれらを読んで、私の裁判にかけ

(1) М. А. Саблинへの書簡, В. Г. Короленко. Избранные письма, т.3.

(2) Там же. М. Горький への書簡。

(3) Илларион Галактионович Керолонко (1854~1915) ——В. Г. の弟。兄と同様に追放と流刑の後、ニージニイに居住し、仕上工として労働しながら職人たちの間で組織活動をおこなっていた。このことについては《わが同時代人の歴史》の第II巻第5篇参照。

ろと要求している。一つは——《ネレーポ伯とその場のすべて》^{*} (!)——
 独創的な着想ではあるけれど、高度に不細工^{ネレーポエ}な作だ。もう一つの——《塩
 の上で》^{**} はわるくはないオーチュルクだが、明らかに不細工^{ネレーポエ}な伯爵のため
 に苦しめられたのだ。それはともかく、——可哀そうな彼は、手紙で君に
 借金を頼んだそうだね、ところがこつちではこんな意外なことが！……
 彼は私のところへ来たが——具合悪そうで、顔色がすぐれず、蒼ざめて見
 える。この文学が彼をあまりに早く蝕ばんでいる、それにもまして、いろ
 んな奥様連だの令嬢連が早くも彼に過大な期待と称讃の毒をたっぷり飲ま
 してしまったのだ。ヴェーラ・ドミ〔トリエヴナ〕^{***} は彼をハイネ扱いせ
 んばかりだ、それ以上でさえある！ 私まで同じように巻き添えにさ
 れてしまった、——（私はあんなふうには出発しなかった、一般に、才能
 に関して彼を自分よりはるかに高いと考えている、と私が言ったとか）等
 々々。もちろん、この評価に私は責任はない。反対に、あれほど気に入っ
 ているジプシーを扱った小説^{****} に関してさえ、私は筋の若干のロマンチック
 な不自然さを指摘して作者の熱をすこし冷まそうと努力した、概して彼に
 用心ぶかさを吹きこもうと試みた。それはともかく、——一般の喧声は可
 哀そうな彼の頭をぼっとさせている。《ネレーポ伯》は外形からも内面か
 らも粗雑に、抑制なく書かれている。だからこの小説を編集部に送ること
 のできるのは——彼の一行一行が真珠とまがうばかりと確信して疑いをは
 さまぬ人間だろう。3日ほど前、私は彼と親しく話した、——そして私は
 彼とこだわりのない気持で話し（まだ《ロシヤ通報》での不成功を知らな
 いで）、彼の前方には成功や名声よりもはるかに大きい苦労が待っている
 ことを指摘した。彼は理解したようだが、しかし災厄はすでに作られてし

* «Граф Нелело и все тут»——これは発表されなかった、原稿は保存されてい
 ない。

** «На соли»——《ロシヤ通報》には採用されなかったが、後に《サマーラ新聞》、
 1895年18および21号（1月22および26日）に発表された。

*** Маслова В. Д. ——ニージニイに住む「文化マダム」の一人で、ゴーリキイ
 とコロレンコの共通の知人。

**** 処女作 «Макар чудра» をさす。

まった。いまは可哀そうな彼にとって非常に辛いことだろう。⁽¹⁾」

この時期にはゴーリキイはすでに文学を自分の生涯の仕事と定め、苦しい創作的探求を進めていたが、カミンスカヤ夫人との共同生活は徐々にではあるが破綻へと傾斜し始めていた。夫人の「貴族女学校的・パリのニヒリズム」はゴーリキイのまわりを騒々しく軽はずみな城壁で取りかこみ、この城を訪れる「騎士団」の誰かれをパリ式に、粹に「揺ぶつて」は若い夫を困惑させていた。生活の他の諸相については持て余すほどの体験の蓄積をもっていたとはいえ、男女のまじわりについては経験が浅く、これまではストイックな幻想と強烈な好奇心とを持ちつづけてきた若いゴーリキイにとってそれはきわめて強烈な刺戟であったと考えられる。さらに騎士団の誰かれがカミンスカヤ夫人に特別な関心を向けたと同じ程度に、概して文士にはよわい有閑夫人たちが若い作家に関心を示したであろうことが推測される。こうしたことがコロレンコの弟への手紙のなかに示された深い危惧と強い叱責の調子を生みださしたのであろう。当時を回想しながらゴーリキイは書いている。

「私は、このような生活が、私が歩いているその道から私をはずしてしまいうるものであると考えた。私はすでに、生活のうちに文学以外のどんな場所も私にはない、ということを考え始めていた。しかしこの条件のなかでは仕事をすることは不可能であった。⁽²⁾」

この悪条件のなかでも、しかし、ゴーリキイは次第に本来の自分を取りもどしていった。1894年にはすでに書記の仕事をやめて文学創作に専念し、1行2コペイクという殺人的に低廉な稿料ではあったが曲りなりにも筆一本で立ち、地方新聞に作品を発表していた。こうして、94年の4月から7月にかけて25回にわたり、最初の中篇小説『不幸なパーヴェル』（Горемыка Павел）も発表された。

この年の夏、ゴーリキイはふたたびコロレンコを訪れた。

「……私はコロレンコにお伽話《漁師と妖精の話》と書きあげたばかりの短

(1) И. Г. Короленкоへの書簡より, Гос. б-ка имени В. И. Ленина.

(2) «О первой любви». С. с. т. 15, с. 113.

篇小説《イゼルギリ婆さん》の原稿をもっていった。」コロレンコが不在だったので、彼は原稿を置いてその日は帰った。翌る日、「晩に話しにいらっしやい」という手紙を受取って彼は再度訪れる。

「——さてと、——卓から私の原稿を取り上げて、それで自分の膝を軽くたたきながら、彼は始めた、——私はあなたのお伽話を読みましたよ。もしもこれを書いたのが、ミュツセの詩を、しかもわが愛らしきムィソーフスカヤの婆さんの翻訳であんまりたくさん読んだお嬢さんだったなら、——私はお嬢さんに言うでしょうね、《わるくはないが、それでもやはりお嫁にいきなさい!》と。しかし、あなたのような荒っぽいのっぽがなよなよした詩を書くのは——これはほとんど醜悪というものです、いずれにしても犯罪的です。これはあなたがいつ爆発したのです?

——まだチフリスに……

——そう、そう! あなたのにはペシミズムが透けて見えます。このことは考慮なさい、愛にたいするペシミスチックな態度は——適齢期の病気です、これはほかのすべての理論よりもはるかに実際と矛盾する理論です。私たちはあなた方を、ペシミストたちを知っています。あなたのことはあれこれと聞きましたよ……《イゼルギリ婆さん》はずっとよく、ずっと真面目に書かれています、しかし——それでもまた——寓話ですね。これはあなたにいい結果をもたらしませんよ。あなたは入獄したことがありますか? うむ、まだまだ入りますよ!⁽¹⁾」

コロレンコはロシヤ文学の伝統的手法からはみ出た『イゼルギリ婆さん』の文壇における成功を危ぶみながらも、この作品のなかに示されたリアリズムとロマンチズムとの奇妙な混淆に注目した。ここではまだ混淆であるこの二つの要素の統一的発展こそ、芸術の新しい方向を開くものとしてかねて彼が期待していたのである。この会話の直後、彼はこの作品を「ロシヤ通報」に送った。

「三日前、私は編集部《イゼルギリ婆さん》という表題の原稿（筆名

(1) 《В. Г. Короленко》 С. с. т. 15. с. 36.

マクシム・ゴーリキイ)を送りました。私はこれを読み、完全に文学的で、部分的には美しいところもあり、《ネレーポ伯》をはるかに超えるものであることを発見したために、送ったのです。お願い：これを読み、できるだけ時をすごさせずに、この作品の運命を決めること。あなたのところには彼の短篇がまだあるはずです。私はそれを読んでいませんが、しかし《ネレーポ伯》によって——編集部がパシコフに先入感をもつことを恐れています。これは無益なことです。彼を書くものはきわめて不統一です、不細工もあればかなり良いものもあります。概して——充分の注意に⁽¹⁾価います。」

しかし、編集部はこの作品を採用しなかった。たしかに編集者にとっては、権威ある新聞の対外的信用を賭けて未完成の新人の作品を飾ることよりは、既成の定評ある作家の手すさびを得ることのほうがはるかに安全なのである。コロレンコ自身もまた、文壇が新人にとっては冷淡であることを、とくに混淆から統一へと向う道が至難のものであることを知っていた。そしてこれを可能ならしめる稀有の素質がゴーリキイのなかに潜在していることを洞察し、かつまた彼の生活環境がこの資質を曇らしていたことをも知っていた。

「いいですか、——あなたとざっくばらんに話しましょうか？ 私はあなたをすこししか知ってません、あなたのことはいろいろ聞いています、そして自分でもあれこれ見えています。あなたの生活はよくない。こんなところで暮すべきじゃない。私が思うには、あなたはここから出てゆくか、あるいは適当な、馬鹿でない娘と結婚しなければならない。

——しかし私には妻がいます。

——それがよくないというんです！

私はこの主題で話すことはできないと言った。

——いや、これは失礼。⁽²⁾」

(1) М. А. Саблин への書簡より, В. Г. Короленко. С. с. т. 10.

(2) «В. Г. Короленко». С. с. т. 15. с. 37.

コロレンコはここでは、ゴーリキイの私生活に立ち入った干渉をしたことを詫びて、話題を変えているが、そのことで彼の生活を改めさせることを諦めたのではなかった。しばらくして、ゴーリキイが短篇小説『チェルカッシュ』(Челкаш)の原稿をもってコロレンコをたずねたとき、コロレンコはこの作品を高く評価し、「ロシヤの富」に掲載することを彼に約束した。⁽¹⁾それから

「コロレンコは私の真向いに立って、自分の重い両手を私の肩に置いた。

——いいですか、あなたはここから出てゆくわけにはいきませんか？ たとえば、サマーラへ。あそこの《サマーラ新聞》には私の知人がいます。よかったら、あなたに仕事をくれるようにと彼に手紙を書きましょう。書いていいですか？

——でも、私がここには誰かの邪魔になるのですか？

——あなたの邪魔になっています。

明らかに、彼は私の暴飲や、《風呂場の躁宴》や、一般に私の《背徳的生活》——そのもつとも主要な悪徳は貧窮であつたが——についての噂を信じているのだつた。町から出てゆくべきだという B. Г. の執拗な忠告は私にはすこしばかり屈辱であつた、しかしそれと同時に、《悪徳の場》から連れ出そうと

(1) 《Челкаш》は雑誌《Русское богатство》1895年6月の附録に収められた。1894年12月13日、コロレンコはミハイローフスキイに書いている。「……《チェルカッシュ》を手を入れた形で送ります。(事務所宛に小包で)。ああ、近い時期に発行される小冊子にこれを掲載することができたら、どんなにすてきだろう。小説はすてきだが、作者は病氣していて金に困っています。」(B. Г. Короленко. Избранные письма. т.3) この時期のゴーリキイの生活における病氣と経済的逼迫については、次の書簡によって明らかである。

「尊敬するウラヂーミル・ガラクチオーノヴィチ！」

私は《P. 6.》編集部で《У моря》という短篇小説を送りました。もしお暇がありましたらどうぞ、ごらんください。私の仕事はよくなく——病みついています。ひどく脚が痛むし、胸も病んでいます。部屋は借金のために追いつてられています。編集部で私に前借りさせてもらえないでしょうか？ 《Неделя》で私の原稿を見つけてどうやら印刷するらしいとのこと。私のことなどでご心配をおかけしてすみません。さようなら。

94年10月17日

あなたの A. ペシコフ」

(C. c. т.28. No.4)

する彼の願いは私の心を打った。

興奮した私はどんな生活をしているか、彼に語った。彼は黙って聞いて、顔をしかめ、肩をすくめた。

——しかし、ほんとにあなたは自分で気づかなきゃいけません——それがすべてまったくやりきれないってことを、そのファンタスチックの一切があなたには縁もゆかりもないってことを！ いいえ、私のいうことを聞きなさい。あなたは出てゆかなければならない、生活を建て直さなくては……⁽¹⁾」

なおしばらく、ゴーリキイはオリガ夫人とともに真面目な生活を打ち樹てようと努力するが、ついにこの年の暮、2人の間に超えがたい断層があることを知って彼女との同棲を清算し、文芸雑報担当記者としてサマーラに赴くことを決心した。

(未完)

(1) 《В. Г. Короленко》. С. с. т.15. с.42.